

「いじめられ体験」が人格発達に及ぼす阻害的影響について
— 自己愛性格症例の治療経験から —

清 水 信 介

I. はじめに

周知のように、「いじめ」は今日の子どもにおける重要な問題の1つであり、さまざまな視点から論じられている。一般向けの図書を含めると、「いじめ」に関する書物の氾濫はおびただしいが、「いじめられ体験」がもたらす影響や障害について具体的な事例に即して検討したり治療について論じたものは意外に少ない。「いじめられ体験」が引き起こす心理的問題に関するまとまった報告としては、精神科医立花(1990)⁹⁾による論文が挙げられる。立花は学校での「いじめられ体験」が発病の契機や症状の形成に強く影響していると思われる思春期の精神科患者について検討している。25例の症例を症状の特徴から、幻覚妄想群、ひきこもり群、空想逃避群、身体症状群の4群に分け、各群の特徴について記載し考察している。それ以外にも、他の研究者の手による「いじめ」を契機とする適応障害の治療報告^{2) 11)}が散見されるが、心理療法的にみて参考になるものは少ない。

筆者は、青年期事例の心理相談において、過去の「いじめられ体験」の否定的影響を色濃くひきずっているケースに出会うことが間々あり、「いじめ」という心的外傷体験の影響に関心を払ってきた。本稿において提示する事例もそうした1つである。この事例は、中学時代に「いじめられ体験」をもち、その体験が以後の人格発達に阻害的な影響を及ぼし、後に対人恐怖症状を呈するに至ったものである。

本論文の目的はつぎの諸点に置かれている。1つは、「いじめ」現象における「人格の影」の問題について論じることである。「いじめ」問題は、「いじめっ子」と「いじめられっ子」の間の一時には、周りで傍観している者も含めて考える必要があるが—微妙な相互作用の中で発生し、発展し、あるいは持続していることが少なくない。「いじめ」はさまざまな要因が複雑に絡み合いながら生じているものであり、筆者もこの問題をここで述べるような視点だけからとらえている訳ではないが、「いじめ」問題の臨床では、本稿で取り上げるような視点も大切なのである。2つ目の論点は、「いじめられ体験」が人格発達に及ぼす阻害的な影響についてである。この問題も単一の事例で論じ切れるものでないことは承知しているが、この種の問題

について考えていく上で本報告も意味あるものとする。3つ目は、上述の目的とは趣きが異なって、対人恐怖の理解と治療に Kohut の自己心理学的見解を援用することの有効性について述べることである。

II. 症例の提示

1. 症例概要

ここで取り上げる症例は、対人緊張、振顫恐怖、視線恐怖などの対人恐怖症状を訴えて来談した芳男（仮名）と名づける男子大学生である。初回面接時、彼は「人という不安な気持ちで寛げない。道で知人に会いそうになると避けてしまう。授業の時に全身が硬直して、字が書けない位になることもある。また、急に不安になり、身体の奥から来るような寒さを感じて震える」と述べている。芳男の陳述にもとづく家族関係、生育歴の概要は以下の通りである。

【家族構成】 父親（53歳）、母親（50歳）、姉（26歳）と本人（23歳）の4人家族。父親は会社員。芳男にとって、父親は影の薄い存在であり、会話することも少ない。母親はパートで会社勤務、神経質で不安傾向の強い人である。姉は芳男が高校1年時に心の病をわずらい、以来何年間も家に閉じ籠った生活を続けている。

【生育歴・問題歴】 幼少時、芳男は母親への依存の強い子どもであり、家庭ではわがままを通す方であった。母親は姉よりも芳男を可愛がり、彼ばかり褒める傾向がみられた。小学校時代には、友人関係で困ることもなく、順調に過ごしていた。特に高学年の頃は成績も良く、よく喋る方で、クラスの中心的存在であった。ところが、中学に入ると、小学校時代から仲良くしていた2人の男子D夫、Y郎との関係が悪化した。芳男とD夫は、ともに好きなK子をめぐって競争関係となり、気まづくなった。さらに、D夫たちが不良グループに属するようになったので、芳男は彼らと疎遠になった。D夫たちは芳男を嫌っていじめるようになったが、芳男自身にはその理由が分からなかった。芳男には目立ちたがりの面があり、人目を引く靴下や靴をはいたりしていたが、ある時不良グループの上級生に因縁をつけられ、制裁を加えられた。学校のトイレに呼び出され、同学年の男子S男が上級生に命じられて芳男と決闘させられた。その事件の翌日から芳男は数日学校を休んだが、その間上級生の不良のリーダーから脅しの電話がかかったりして怖い思いをしたという。それ以来、級友たちは芳男が不良グループから目を付けられているので、彼に関わらないようになった。芳男は、学校で怯えながら、自分が目立たないように努めて、辛うじて自分の居場所を得ていた。そして、中学時代の生活は捨てよう決心し、高校ではいじめっ子と一緒にならないようにしようと決めて、学力水準の高いH高校を目指して勉強だけに打ち込んだ。志望通りにH高校に入学。そこでは演劇部に入った。1年生の時は順調に過ごしていたが、2年生頃から学級での自分と演劇部における自分との間に大きなギャップを感じ始めた。演劇部における芳男は多弁で、部を盛り立てる中心的存在であったが、学級では仲間と深く関わろうとしなかった。しかし、当時彼はそのことを特に悩

みとしてはいなかった。国立P大学に入学後、あるサークルに所属し、積極的にやっていたが、3年生の終わり頃からアルバイト先の仲間との人間関係で、高校時代と同じように融けこめない感じを抱いていた。4年生の夏に、高校時代から付き合いしてきたJ子から別れを告げられた。それまでも他者になじめない自分が気になっていたけれど、J子に好かれていることで自分を支えていたので、彼女との別離は強い衝撃をもたらした。彼女と別れた少し後から、前述のような対人恐怖症状が生じる。そして、発症から1年以上経過したX年12月中旬に筆者の下を訪れた。

2. 治療経過

芳男の心理療法は、X年12月中旬からX+2年2月中旬までの1年2カ月間にわたり、43回の面接を行った。以下では、治療過程を5期に分けて報告する。

第1期 (第1回面接～第5回面接：X年12月中旬～X+1年2月下旬)

第2回面接までは、主訴や生育歴などについて話し合った。第2回面接の際に、夢についての話合いを提案し、彼の同意を得た。次の回に報告された夢は、心を病む姉を抱えた家族の緊迫した状況、オロオロする母親、問題に関わらない父親、そうした家族関係における芳男の立場、役割などを物語っていた。

第4回面接には、芳男の自己愛的な性格傾向を示唆する夢が報告された。

【夢1】立派な屋敷のパーティできれいな女性も沢山いる。私は女性たちの存在を強く意識して、自分をかっこよく目立たせようとしている。自分がその場の中心になっているような優越感をもっていた。庭で遊んでいると、老婆が現われ、1本の草を差し出す。私がそれを掴むと、つまんでいる所だけ鉄のように赤く発熱した。私は驚いて手を離れた。その老婆は、「この草は線香草と言ひ、死者を冒瀆する者に罰を与える草なのだ」と言う。それを聞かされても、私は特に反省するのでもなく、その草に興味津々であった。周囲を見ると、家の日陰の方にその草が沢山生えていた。私は老婆の言葉を意に介さず「この草は面白い。売り出せば儲かるぞ」などと友達と話し、その草をネタにパーティで自分をアピールできると考えていた。(場面変化)私はグラスを両手に持って部屋の中を歩いている。ある女の子と暖炉の前ですれ違おうとした時、私の服に火の粉が飛びはねた。私は手で叩いて消そうとしたが、消えずに燃え広がった。火が全身に回って私は気絶した。しばらくして気づくと、自分は目を閉じたまま寝ていた。外は嵐で、冷たい風が吹き込んでいる。私は眠りに落ちたが、あまりの寒さに目を覚ました。私が寝ている所は、ひどくおんぼろなバスの中で、全開になっている窓から冷風がビュービューと吹き込んでいる。突然運転手もいないのにバスが走り出す。前方のフロントガラスを見ると、寒々とした山の中を山頂へと向かって伸びている1本の道路が見える。私はこのバスは一体どこへ行くのかととても不安な気持ちに襲われた。何かの気配を感じて、後を振り向くと、怪しい感じの中年

男が座っている。男は「私は今起きていることのいきさつをすべて知っているのだ」とでも言いたげな顔つきでジーッと見ていた。男の嫌味な笑いを含んだ顔を見た時、言いようのない恐怖を感じ、大声で叫ぶ。その声で目が覚めたが、動悸がして冷や汗をかいていた。

この夢への連想として、芳男は「自分には女の子を意識して格好よく目立たせようとする傾向がある。自分を受け入れてくれる集団ではリーダー的に振る舞うが、調子が悪くなると人を避けることになる。夢の最初の部分は、お城の王子様みたいに自分が中心になって振る舞う、自分がこうありたいと望む状況であるが、気絶後の展開は現在の自分の状況だと思う」と語る。夢1の終末部分に登場する中年の男性像は、芳男が治療者を万能的な存在のように理想化している可能性を思わせた。面接において、彼は治療者の意見、指示を求めるなど依存的な態度を示したが、そうした態度の背後に Kohut (1971)⁴⁾の言う理想化転移が生じていることも推測された。

第5回面接に報告した夢は、《りんご狩に行くが、危険な蜂が沢山いるので恐れている。すると、そこで働いているプロのおじさんが「このりんごは甘くておいしいが、それは蜂たちが密を入れてくれるお陰である」と教えてくれる。私は少し蜂を見直した》というものであった。この夢の話合いを契機に、彼は自分の内部にある攻撃性の受けとめ方について目を向け始める。

第2期（第6回面接～第16回面接：X+1年3月上旬～5月中旬）

この時期に入ると、中学校時代の仲間関係やいじめられ体験に関する夢を多く報告するようになり、夢を通じて過去の出来事を振り返り、自分のあり方を見直すようなプロセスが進展する。

第6回面接には、2つの夢が報告された。

【夢2】中学校に登校すると、私の下駄箱に上靴がない。自分に対する嫌がらせであると直感した。靴はトイレに投げ捨てられていた。私は強い屈辱感を味わう。朝の会の間中私は今後の対処について悩んでいた。心の中では怒りと恐れと不安がごちゃ混ぜになったような感じだった。近くの席にはその事件の首謀者と思われる普段から仲の良くない奴らが何事も知らないという感じで座っていた。私は「やり方が汚いじゃないか。文句があるなら、直接言えばいいのに」と燃えるような激しい怒りを感じていた。しかし、彼らがやったという確証もないので、黙っているより仕方なかった。その事件以後、私はそのグループの全員を敵視するようになり、また彼らが自分を敵視しているのではないかと脅えるようになった。それ以前は、中学生活はそんなに暗いものではなかった。しかし、その事件があってからは、私はめっきりと元気をなくした。「自分は靴をトイレに投げ捨てられるほど人に嫌われている」と思い、そのことが心にひっかかって、どうも調子が出なくなった。

夢2は中学時代の記憶を蘇らせるもので、芳男は「この経験は自分の中ではすごく屈辱的であり、人を疑いの目で見るとなった原点となった経験だ。今考えると、中学の時に怒りを表わせばよかった。そうすれば、いつまでもズルズルとひきずることはなかったと思う」と語っている。

【夢3】私は少し飲酒して車を運転しており、道を間違えて、港の方に入り込んだ。その周辺には暴走族の車が走り回っていた。私はできるだけ早く元の道に戻らなければと思った。埠頭の方を見ると、少し浮ついた感じの暴走族の男が仲間の女に気があってふざけている。男は女の服をひきちぎろうとして、女の肩を傷つけてしまった。男は動揺していた。女の彼女と思われる男が現われ、「俺の女にとんでもないことをしてくれたな」と言って、女を傷つけた男の肩の肉を大きなナイフでえぐりとった。男の肩から血が吹き出し、その男は絶叫した。周りで見えていた人々もあまりの残酷さに言葉を失い、辺りは静まりかえった。ところが、切った男は「なーんちゃって。冗談だよ！みんな騙されやがったな。この肉と血は作りものさ」と言って、それを見せる。しかし、自分の肩を切り落とされたと思っ込んでいた男は、そのトリックに気がついていなかったの、あまりのショックで気絶していた。私はそれが作りものの血であったことに少し安心したが、なぜあの男がそのような演技を皆の前でいきなりやって見せたのか全く分からなかった。

夢3の暴走族は中学時代の不良グループのイメージと重なり、芳男にとって恐ろしい存在である。それは彼の攻撃的な影の像でもある。ここでは、退行して影の世界を垣間見ている印象である。暴走族の男性像について、彼は「自分の中の激しい攻撃性のような気もした」と語っている。

第7回面接には、《中学時代にトイレで喧嘩をさせられた相手S男と出会うが、私はそれほど彼を嫌ではなく、気にしないで普通に話をする夢》を報告する。この回、芳男は体が震える体験について語り、自分は人が怖いというよりも震えが起こること自体を怖がっている。自分の中には「震える自分は格好が悪い、弱虫だ」と批判的に見る部分があると述べ、彼が抱いている理想的自己像と合わない側面を受け容れられないことが明らかになる。第9回面接には、《中学校のクラスで自分が発表している時に、いじめっ子のY郎が、発表しているテーマとは関係のないことで足をひっぱる感じで邪魔をする。それで、自分は「それは因縁つけた。今話していることと関係がない」と反論し、口喧嘩になる夢》を報告する。中学時代には、Y郎に対して脅えていて直接言い合ったりすることがなかったが、その夢では恐怖感がなく反論している。また、第12回面接にも《自分の後ろの席に座っている不良グループのリーダーD夫が、嫌がらせをしてワイシャツにインクをかけてくる。自分は腹を立てて、負けないでやり返す。何度か応酬し合う。その後D夫は同じ嫌がらせをしなくなる夢》を語っている。このように、夢のレベルで、以前よりも攻撃的なものを表現する方向に変化しつつあることがうかがわれた。

第13回面接には、持参した夢についての話合いを契機として、中学、高校時代に仲間とのつ

ながりがなくクラスへの所属感をもてなかったことなどが語られる。この回に報告された夢の1つは、彼が自分のあり方を見つめていく上で転回点となるものであった。

【夢4】中学校にいますが、私は控え目、謙虚な自分である。中学の頃皆から軽く見られ、私も馬鹿にしていたO君がいるが、夢では私は彼に気配りしている。(場面変化)私がトイレで小便をしていると、例の不良たちが2、3人でやってくる。私は「まずい奴らが来た。また因縁をつけられるのじゃないか」と思ったが、彼らは全然眼中にない感じで通り過ぎて行った。いつもなら「ほら、芳男がいるぞ」と因縁をつけられそうな感じになるのだが、誰もいないかのように通り過ぎて行った。私は直感的に「自分が謙虚だから目につかないのだな」と思った。「ああ！こうやって謙虚にしていれば、別にあの人たちの気に触らないんだな」と思い、普通の人たちはこの不良たちともこういう感じなのだと思った。別に不良が気にならない人に対しては、彼らはチョッカイをかけていかない。自分は不良が「ああだ、こうだ」と言ってくると考えていたけれど、とくに不良の目につかない人には関係ない存在なのだと思った。

夢4の中の芳男は、中学時代のあり方と全く違って、控え目、謙虚であり、不良たちの気に触らない。芳男は、その点に注目して、これまでの自分のあり方を振り返る。中学時代から、芳男は内心「俺は皆とは違うんだ。特別なんだ」という優越感のようなものを抱いていた。また、他者に対して良いところを見せたいという気持ちが強かったが、自分が受け容れられるかどうか不確かな場面ではそういう面を表わさなかった。心の中では自分を曲げたくない気持ちが強いけれど、自分を表わして対立したり言い争うのが嫌なので心の中に留めているという。

続く第14回面接には、自分のあり方についての内省がさらに深まる。この回に報告した夢はつぎのようなものであった。

【夢5】私が教室で座っていると、高校の演劇部で仲が良かった後輩たちが、私を無視して横を通り過ぎて行く。本当は私がいるのを分かっているのに、意図的に私に気がつかないようにしている。私は、彼らに避けられているなど感じた。

この夢の「教室にいる自分」は、演劇部では見せていない自分である。演劇部の後輩たちはそれに気づかないふりをしている。「演劇部ではこちらの自分。クラスではそれとは別の自分」というように、自己が2つに分割され、一方は否認されて、統合されていない。治療者は、それら2つの自分の関係をどうしていくかが課題になるのではないかと投げかけて、話し合う。芳男は自分の中に暗い面があることにも気づいているが、他者に対してそういう面を見せたくない。明るく社交的で元気が良く、皆を盛り立てるような自分でありたい。しかし、そういう思いが強くなり過ぎて暗い面を否定しているので、自分の暗い面や弱い面が出てくると、「これは一大事」と恐れ、震えるのではないかとと思うと語る。

第16回面接には、車を運転している時に経験する視線恐怖について語る。バックミラーを通

して前後の車の運転者と視線が合うと、相手に不快感を与えるのではないかと感じて怖くなる。特に、後の運転者と視線が合うとギクッとするので、視線を合わせられないという。この回に、芳男は中学時代の仲間との関係がうまくいっている夢をいくつか報告した。それらの中から2つの夢を紹介する。

【夢6】私とK子、D夫の3人は体育館で雑談をしていた。その時の私は仲間外れにはなっておらず、クラスの仲間と一体感があり、とても自信に満ちていた。自分が集団に所属しているんだという思いが、これほど自分に自信を与えるものなのかと感じていた。私は好意を持っていたK子と楽しく会話をしていた。そして、中学の時に私をいじめた不良の一人D夫も時々その会話に参加していた。3人の関係は、自分が会話の中心にあり、自分が絶好調であった小学校時代の関係に似ている。しかし、この夢の私が昔と違う点もあった。それは、時々しか話に参加しないD夫がそこでの関係を苦々しく思いながらその場にいることに私が気づいている点である。昔の私は、そんなことを全く意識せずに、自分の好きなK子との会話を独占していたように思う。D夫の無言の眼差しは、私に向かって「調子にのるなよ」と囁いているようだった。

夢6に関連して、芳男は中学時代の自分のあり方を顧みる。D夫もK子が好きだったが、自分の方が口が達者だったので、3人である時に自分だけが話していてD夫は入ってこなかった。当時の自分はそれで普通だと思っていたが、おそらくD夫は「芳男は自分だけK子と喋って、自分のことしか考えていない。嫌な奴だ」という不満を感じていて、それが爆発して自分をいじめたのではないかと感じる。これまでどうしてD夫からいじめられるのか納得がいかなかったが、そういうことを考えると腑に落ちると語る。

さらに、夢7ではD夫、S男との関係が友好的なものに変化し、芳男は彼らを弁護している。

【夢7】私と不良グループのD夫、S男とはもはや敵対する関係ではなく、友達のような関係にあった。ある時、彼らが職員室に呼ばれ、先生に殴られて戻って帰ってきた。彼らから事情を聞くと、悪いのは彼らではなかった。先生が理由も聞かずに、憶測で決めつけたのだ。私は頭にきたので、W先生の所へ抗議に行った。私は「殴る前に彼らの言い分もきちんと聞いてください」と言い、先生に事のいきさつを詳しく説明すると、先生は自分が間違っていたことを認め、反省してくれた。

夢6で自身の否定的な面、問題点に目がいくようになったことと関連してか、この夢では心の中のいじめっ子、すなわち彼の影としての部分を許容するような動きが認められる。

第3期（第17回面接～第26回面接：X+1年5月下旬～9月中旬）

第3期に入ると、少し局面が変わって、内なる異性像や本能衝動層のものとの関わりを深めていくテーマの夢が報告されるようになる。

まず、第17回面接頃から、以前に別れたJ子が登場する夢をくり返し見るという形で内なる

女性像との関わりが始まる。また、《迷路のような所で、ヌイグルミの熊に追いかけられ、必死に逃げている夢》《闘牛をしており、棒で牛の頭を小突いて刺されないようにしのいでいるが、牛がもう1頭出て来たので、状況が厳しくなってきたと思っている夢》などを報告し、衝動層のものとの関わりを持つことへの不安が存在することもうかがわれた。第1期には、本能衝動、攻撃性との関わりを主題とする夢が出現していたが、その後そうしたテーマは棚上げされた感じで経過していた。この回、本能衝動や攻撃性との関わりについて話し合う中で、芳男は「今の自分は自分らしさが出ていないと思う。自分らしさが出てしまうことによって、他人に嫌な思いをさせるのじゃないかという不安があって、それでブレーキをかけているような気がする」と語っている。

そして、第18回面接には夢8を報告する。

【夢8】私は知らない女性と自分たちの子どもたちと一緒に山の上の展望台にいた。夜中で、青い月明かりでとても幻想的なムードであった。私は月を見ながらその女性とのことで物思いにふけていた。私はその女性を本当に愛しているのか分からなかった。2人はキスをした。私が彼女に「子どもたちは」と聞くと、3人の子どもはプラモデルになっていた。私は2人の子ども（プラモデル）を大事そうに胸に抱いていた。帰ろうとして、駐車場の所まで下りて行くと、怪しい男がおり、私のバイクにいたずらをしていた。それを見た私は激しい怒りを感じた。私の中から1人の自分が飛び出してその男に向かって行った。その怒っている自分は抱いていたプラモデルの子どもを後に投げ捨て、「こら、お前何やってんのよ！」と言ってその男に蹴りを入れた。もう1人の弱気な方の私は「これは巻き込まれてはまずい」と思って少し後に逃げたが、その際私は投げられたプラモデルの子どもを拾って安全な場所に移動した。その時、私は「これで、この子どもの頭が悪くなったのだろうか。いや、そんなことはないな」と思った。なぜか蹴りを入れられた男は後で見ていた弱気な私の方にかかってきた。弱気な方の私は「何で俺の方に来るんだ」と思ったが、もう引き下がれなかったので、もう焼け糞という感じで相手の腹をめがけてパンチを入れた。

この夢では、内なる女性像（アニマ）との関わりが生じているが、その女性を愛しているのかどうかも分からない。新しい可能性のイメージを荷う子どもが生まれているが、それは命をもたないプラモデルである。夢の後半部では、怒っている自分と弱気な自分とに分離して、前者が相手に向かっていくが、相手は弱気な自分の方に向かってきて、争いに巻き込まれる。このイメージは、中学時代に無意識的に攻撃性を表わし、仲間からのいじめを招き寄せていたメカニズムをも連想させる。芳男は「弱気だけど冷静な自分と感情的な自分。その2つが分離しているのが自分のあり方だが、どちらを出すのがいいのか」と語る。第18回面接の後、芳男が教育実習に出かけるので面接を20日間ほど休むことにした。

第19回面接に来談すると、教育実習を無事に終えることができ少し自信がついたと語る。

そして、教育実習から帰った夜に見た夢を報告する。

【夢9】私は実家に帰っており、病院に入院している母に「教員になれたよ」と報告する。私の報告を聞いて母は「よかったね」と言ってフーと死んでいく。ホッとしたら力が抜けて死んでいく感じである。

この夢は芳男の心の中の母親像との関係が変化しつつあることを示唆している。芳男は、夢9について、「自分は昔から母親への依存が強く甘えて育ってきたが、心理的に少し母から離れてきたのかな」と語っている。この夢心像の出現と連動するかのようになり、続く第20回面接には、父性的なものとの関わりの回復を思わせる夢が2つ報告された。

【夢10】私は教師になっており、年配の教師と子どもの教育について議論している。私は子どもの気持ちを一番に考えなければ駄目だと言う。年配の教師は子どもの気持ちよりも「ここの育てなければならない」というものがある、叩いたり強制したりしてでもそれに近づけることがその子のためになるんだと言う。

【夢11】私と父が割と仲良くやっている。テレビのニュースか何かを見ながら、2人で「あれはこれこれこうで、駄目だよ」「うん。そうだ、そうだ」というように、お互いに意見が一致していた。

芳男は、夢10について「年配の教師の言うことも間違っていない。両方の意見とも大事じゃないかと思う」と述べる。また、夢11については、「今まで父親に対して否定的な感じをもっていたが、最近は“やはり自分の父親なのだから、仲良くやっとう”という気持ちが出てきた。以前は自分を保護してくれるのは母親だけだという感覚が強かったが、自分の心の中で父と母のバランスが良くなったのかなと思う」と語っている。

第21回面接から第23回面接頃には、言わなくてよいことを軽率に口にして人を傷つけたり独りよがりな振る舞いをする彼のあり方に焦点を合わせるような夢がよく見られた。自分の短所、好ましくない性癖に集中的に目を向けさせられている印象であった。

第25回面接には、夏休みで1カ月余り帰省して高校の演劇部の仲間たちと会ったが、その時に意識過剰となり緊張したこと、また車を運転している時に前後の運転者と視線が合うのが怖いことなどを再度語り、何とか治らないものかと訴える。しかし、その際に芳男がヘラヘラ笑いながら話すので、治療者は違和感を覚えた。彼のそうした態度は以前から認められたのであるが、これまではあえて取り上げなかった。彼のその時の態度に対して治療者が感じたことを表明して話し合っていくと、芳男は「何か別の自分のことを話しているような感覚はありますね。だから、問題に接近しないというか。ここで話している時の自分は、そういう状態になっていないので、緊張している時の自分を認めていない感じがあるんでしょうね。笑うことによって、問題を今の自分から離れたままで話したいというか…」と述べる。

続く第26回面接には、前回話し合われた自分の問題に対する取り組み姿勢に関わるような夢が報告される。

【夢12】私は医学生で、人体解剖の実習をしている。2人ずつペアになり、相手の胸を開く実習であった。先生が道具の使い方や手術の手順などを説明している。私はその話を必死に聴いているが、それをやれるかどうか自信がなかった。自分が切ったら失敗するのではないかと不安で踏ん切りがつかないが、自分が手術されるのは構わないという心境だった。いよいよ私が相手の胸にメスを入れなければならない時がきた。私は恐ろしくなってその場を逃げ出した。学校を飛び出そうとして走っていると、1人の医師に止められる。私は「どうしてもあの実習は出来ません。気持ちが悪くなってしまいます」と答えた。その医師は「あれ位の実習でびびっていてどうするんだ。本当のオペはその何倍も大変なんだぞ。君は医者としての適性がないかもしれないなあ」と言う。私はあの実習は自分には生理的に無理なものであったという自覚を持ち、妙に自分に納得して病院を後にした。

この夢についての話合いにおいて、自分の内面に取り組むことへの躊躇い、抵抗のことが取り上げられた。芳男は「今話していて気がついたのだけれど、カウンセリングを受けて今の自分を何とかしようとする事自体に矛盾した動きが含まれている。自分が描いている理想的自己像からすると、今の自分は嫌な自分だから何とか理想のレベルへもっていきたいと思う。ところが、それは今の自分を見たくないという抵抗にもなっていることに気づいた」と語る。治療者は、夢12の「自分がメスをもって切ることはしたくないが、自分が切られるのはいい」という部分や、これまでに認められた治療者の意見、指示を仰ぐようなあり方に言及し、カウンセリングにおいても自分でメスをふるわないうで治療者に頼るような態度があるのではないかと投げかけた。

第4期（第27回面接～第36回面接：X+1年9月下旬～12月中旬）

この時期に入ると、芳男は自己の内面に取り組む姿勢を強める。夢では、攻撃性を表現することへの躊躇いが軽減する。また、現実水準では、居酒屋でアルバイトを始め、そこでの人間関係の経験から自分のあり方や対人関係について気づきを深めていく。

第27回面接には、そのような変化を示唆する2つの夢が報告される。

【夢13】中学校の便所での喧嘩の場面にいるが、私の心境は以前とは異なっていた。以前は「喧嘩、暴力は絶対に駄目だ！」という気持ちが極端に強かったが、夢では喧嘩を肯定するような気持ちが強かった。喧嘩になっても、全くひるむことなく、鼻血が出ても自分の正しさを主張するために前に進み出て闘った。私の中で「これは聖戦である」との気持ちがあったので、怖くはなかった。また、「この闘いから逃げ出してまで生きること何の意味があるのか」という思いもあった。私はそのような思いを抱いて思いっきり相手を殴った。勝敗がどうなったのかはよく覚えていないが、心の中にさわやかな感情が流れていた。「そうか、これでよかったのか。あの時もこうしておけばよかった」と思った。

【夢14】地下へ続く螺旋階段を降りて行くと、大学での親友Cがいた。彼の姿を見た時、な

ぜか久しぶりに本当の自分でCと語り合えるような感じがして嬉しくなった。Cは以前よりも穏やかで、優しそうな顔になったような印象を受けた。彼はなぜか耳に補聴器を着けていた。私が「それどうしたの?」と聞くと、彼は「ああ、どんなふうに聞こえるものかと思って試しているだけだよ」と言う。彼は自分自身の心の声を聴いているかのように耳をすませている。

夢14について、芳男は「この夢のC君は自分自身かもしれない。本当の心を自分で聞いているような感じがした」と言う。そして、「何か仕組みが見えてきた感じがする。これまで、身体が固くなり手が震える症状が、自分の外側に原因があって起こるように思っていたけれど、実はそうではなくて、自分で自分の首を絞めているという感じがする。自分で見苦しいと思っている自分に出会うことを怖がっている。震えるから怖い。怖いから恐れる。恐れるから余計震えるという悪循環をしていた。自分が見たくないもの、嫌なものとして避けるから、余計どんどん首がしまっていく。だから、その手を緩めていかなきゃいけないのは自分なのだと思った」と語る。

第28回面接頃から、芳男は居酒屋でアルバイトを始める。その職場に勤め始めた頃は、先輩は偉いということで彼らの言い分が何でも通ってしまうことを不合理に思い、抵抗を感じていたが、第29回面接頃には職場での人間関係を円滑にもてるようになる。そして、以前の自分のあり方を振り返って、「少しずつ自分が変わってきているのかなと思う。アルバイト先の人たちと交流して、改めて友達の大切さを感じている。恋人（J子）に対しては大切だという感じが強かったが、友達が大切だという思いは薄かった」と語っている。その後も、芳男は他者との関係における自分のあり方をみつめ、人間関係の機微について学んでいく。自分は不快感などを顔に表わしやすいが、ただ馬鹿正直にどこでも裏表のないあり方をしようとするのも変かなと思うようになった。お互いの関係を円滑にしていくには、状況に応じて裏表を使い分けることも必要なのだと思った。中学時代の自分は、相手に対する反発や不快感をどこかで表わしていたのだと思う。言葉で「俺はお前のこと嫌いだよ」と言っているのではないので、自分では表わしているつもりはなかったが、周りの人にはそれが伝わっていたのだろう。大学3年生頃にやっていたアルバイト先では、自分を表わすのを恐れ、嫌われたくないので無表情になっており、人に融け込めなかった。しかし、最近は、アルバイト先の先輩たちに対しては仕事だと思って相手に合わせているが、それ以外の人との間では自由に喋っている。嫌われてもいいんだと思って自由に行動した方が嫌われないように思える。他の人は結構許容範囲が広いのだなと感じたと語る。

第32回面接には、中学時代のいじめっ子Y郎と仲直りをする夢を報告する。

【夢15】私とY郎は共通の敵と戦うために仲直りをした。私の方から協力を提案し、共同作業の中でだんだんと心が開いていった。昔彼と友達であった感覚を思い出した。私は「ああ、彼にもこういう良いところがあったんだよな」と思った。

Y郎との関係は以前の夢におけるよりもよいものとなり、和解が生じている。また、この回には対人不安、緊張の背後で働いているものを以前よりも明確にとらえて語っている。他者といる時に、自分がそこにいることが周りの人に嫌な感じを与えるのではないか、自分の動き、視線を変に思われるのじゃないかという不安がある。他者の目に映る自分の姿がリラックスした良い感じのものでなくてはならないという観念が強くなり、自分がそうした理想像からズレているのが変だと思って、自分は普通の人間じゃないという気持ちになる。自分は緊張する人間なのに“緊張しては駄目だ”とってしまうので、余計緊張してしまうと語る。

第33回面接頃、芳男は自分本位で他者への配慮を欠いた振る舞いをして指導教員から叱られ、さらにその頃交際していた女性M子との間でも類似の指摘を受けるという経験をする。それらを契機に他者の気持ちを考えない自己中心的な傾向などに直面せざるをえなくなる。そうした問題に取り組むことは彼にとって辛くきびしい経験であったが、他方彼を勇気づける出来事も生じた。第35回面接頃、それまで1年余り連絡が途絶え疎遠になっていた親友C君と再会して話し合う機会があり、二人の関係が回復したのである。以前J子から別れを告げられた際にC君に相談したところ、彼から「君は言わなくてもいいことまで言うところがある」と言われた。それで、C君に自分のすべてを否定されたように感じて彼と疎遠になっていたが、今回彼と話してみても自分の誤解であったことが分かり、以前のような親しい関係が回復した。C君とは大学で親しくつき合い、深い話をする事が多く、C君は自分の価値を支えている存在であった。J子を失った直後にC君からも否定されたと思って、自分の人格を支えている2つの軸が両方ともとれてしまった感じであった。今回のC君との経験から、人ときちんとコミュニケーションを持ち、確かめていくことの大切さを学んだと語る。さらに、C君の優しさ、他者の気持ちを大切にすあり方を示すエピソードを語り、「以前の自分は、思い遣りや優しさなどに価値を置かず、そんなものがなくても理屈さえ通ってればいいんだという考え方であった。俺のどこが悪いんだというような傲慢なところがあった」と省みる。そうした気づきについて述べた後、「友達の力というのはすごいですね！」と感慨深く語る。

第5期（第37回面接～第43回面接：X+2年1月中旬～2月中旬）

第5期に入ると、対人恐怖症状は消失する。芳男は自分の中にある弱い面、暗い面などを受け容れるように変化し、過去の自分を振り返り、いじめられ体験や対人恐怖が生じた背景について洞察を深めていく。

第37回面接時には、対人恐怖がなくなり他者の目も気にならないと言う。この回、芳男はこれまでの自分のあり方を振り返り、つぎのように語る。以前は自分で勝手に自信をもっていただけかもしれない。その自信の根拠も、自分が気に入った彼女とつき合っているということだけであった。頼っている相手が素晴らしいから自分も素晴らしいのだという二次的な自信であり、根拠が自分自身にある訳ではなかった。J子と別れた時に、自分がいかに彼女に依存して

いたかに気づかされた。そのように自己評価の拠り所を自分の外に求めるあり方の裏には、自分は大したことないから、外のものに依存していった方がいいんだという思いがあった。中学の頃にそういう癖がついたのではないかと思う。小学校時代には「俺は大した人間だ」と思っていたのに、中学になっていじめられるようになったので、周りから「お前は価値がない」と言われたようなとらえ方をして、「自分には価値がないのじゃないか」と思うようになっていったのだと思う。しかし、よく考えてみると、本当に「俺は価値がないんだ」と思っていなかったような気もする。心のどこかでは「いや、俺は大したものだ」と思い続けている。自分は大したものだと思っているのに、周りから評価されないで、そこに自分を表わしていくことへの迷いが働く。《治療者：自分は大した人間だと思っている部分があって、そういう態度が無意識に表われている。それが相手に影響を与えていることに気づいていたら、戸惑いも起こらなかったと思いますが…》確かに、自分の偉そうな態度が仲間からの反発や悪い評価を招いているなど気づいていけば、戸惑わない。自分は優れた人間なのか、そうではないのか。どっちを信じていいのか分からなくなっていた。そこがそもそもの混乱のもとだったと思う。

この回における話合いは彼にとって意義深く感じられたらしく、札幌を去るまであと1カ月位しか残っていないが、これまで見つめてきたことを整理したいので面接の頻度を増やして欲しいと希望する。そこで、以後週に2回の頻度で面接することにした。

第38回面接には、彼の心の変容ぶりを示す印象的な夢を報告する。

【夢16】パーティをしている部屋で、私はソファにもたれていた。大学2、3年頃の知人の女性が私の側に来た。久しぶりに会ったので、私は何を話していいか迷い、少し緊張した。私が彼女の肩を揉んであげようかと尋ねると、彼女は頼むわと応える。彼女の肩を揉んでいるうちに、なぜか自分も寛いでゆくのを感じていた。私は何のためらいもなく、自然な会話を楽しんでいた。私はこのくだけた感じを求めていたのだ。私はそんな女友達が自分にいることに感謝した。

夢16に登場した知人の女性は、他者の気持ちが分かる、優しい人である。そのような女性像との関わりを深めることによって、芳男も寛いでいく。このイメージは、彼が感情の世界、関係性などの新たな次元に開かれつつあることを示唆しているようである。また、この回には《自分が試験勉強から逃げて他のことをやっている、父親から「やることをやれ！」と一喝される夢》も報告する。彼の心の中に厳しく強い父親像が顕現してきたことがうかがわれた。

続く第39回面接には、芳男のあり方の二面性を浮き彫りにするような夢心像が報告される。

【夢17】居間(洋室)と和室とが繋がっており、私は和室の方で半分眠っているような感じで横になっている。居間にはソファ、絨毯などいろいろ家具があってリッチであるが、和室の方には何もない。居間の方からは和室が見えない。居間の方に客が来て何かを話していた。僕はうつらうつらしてそれを聞いていた。客は大学のクラスメートで自慢話の好きなG君で、「やっぱりこの部屋は寛げる部屋だね」と言い、家具などをほめている。「ソ

ファも良いし、絨毯も良いが、何といてもやはりこの絵が部屋にすごくマッチしているね」と言う。部屋には大きな絵が掛かっているが、それはゴッホの絵のように派手で自己主張的な絵である。私は、客の言っていることと自分の思いとが合っていると思っている。私も、特にその絵が部屋に合っていると思って気に入っていた。少ししてから、私は起きて居間の方へ出て行った。客は「お邪魔していました」と言うが、私は社長みたいな横柄な態度でいる。私は無愛想な感じで客の側を通り過ぎる。

この夢の「自己顕示的に飾り立てた居間で横柄な態度を示す自分」と「何もない部屋で無気力な状態にある自分」というイメージは、Kohut (1971)⁴⁾が描く「病的に分け隔てられた自己の構造」を彷彿させる。夢17についての話合いの中で、彼は改めて自分のあり方に目を向けていく。自分は他者からの評価を気にして生きているけれど、心の中にはやはり自己顕示欲がある。自分のあり方は極端で、自信がある時は社長のよう横柄な態度で振る舞うが、自信がない時は自分らしさを隠して振る舞おうとする。今は対人恐怖は治ってきたが、無気力な面があって、そこが課題だと思う。J子との別れで衝撃を受けて、自己評価が下がったところに問題が含まれている。自分というものがしっかりとある人間なら恋人がいなくなったからといってそんなに落ちこまないと思う。J子と別れたことだけに原因があるのではなく、それ以前の人格の発達が未熟だったことが問題だと思う。中学時代に、勉強中心の生活に傾き、人とのコミュニケーションの方は必要ないのだと放り出して高校へ進学した。高校でJ子と付き合い始めてからは、彼女にベッタリとなった。演劇部という自分を表わせる場所では自分を表現していたが、学級では中学時代の自分のままであり、級友の気持ちが分からないので信用できず、自分を表わしていけないという感じであった。仲間たちは、その違いについてジキルとハイドみたいに別人なので変だと言っていたが、自分自身は演劇部での自分だけを見て、学級での自分については知らないふりをして済ませたかった。しかし、J子との関係を失ってしまったら、自分が考えないようにしている部分しかなくなった。考えないようにしているということは「ない」ということだから、ないはずの空間に自分が生きているので、「俺は一体何なんだ」というように考えざるを得なくなったと語る。

第41回面接には、理想的、肯定的な自己像にとられる意識のあり方を補償するような夢が報告される。

【夢18】スキー場で落ちていたスキーを拾うと、人の名前が書いてある。自分のスキーを持っていなかったので「まあ、いいか」と思って勝手にそれを使っていた。リフトに乗っている時に、中学の仲間N君が「Q君のスキーがなくなった」という話をする。私は「ああ、自分が拾ったスキーだ。これはばれたらまずいな」と思った。山の上に行くと、Q君がいて「それは俺のスキーだ」と言われ、私は困った。私の信用はがた落ちになり、N君も「お前はそういう奴だったのか」という感じで白い目で見ている。

夢18について、芳男は「現実にはこういう行動はしないけれど、自分の甘い面やずるさがこ

ういう形で表現されたのかもしれない。理想の自己イメージとは全く逆だ。理想的なイメージに近づこうとしているけれど、こういう部分もあるんだよということかもしれない」と述べる。そして、最近自分の弱い面や暗い面も認められるようになってきたとも語る。

芳男は、第39回面接の後に某県にあるA大学特殊教育専攻科を受験していたが、第42回面接時には合格の通知を受けていた。この頃には交友関係は充実したものになりつつあったが、以前の他者との関係のもち方についてさらに気づきを深めている。今までの自分の友人関係を振り返ると、別に友達などいなくても生きていけるという感じが強く、友人関係を軽視しているところがあった。しかし、自分のことを話せたり相手の意見を聞いたりできるような友達の存在が非常に大切だということに最近気づいた。今は友人関係を大切にしていきたいと思うと語る。

芳男との治療面接は第43回面接をもって終結となった。最終回に、彼はつぎのように語る。大分やっていけそうな感じになった。今までの自分のあり方を見ると、友人関係でも親子の間のことでも、面倒なことから逃げる傾向が強かった。そして、彼女や友達に依存的になることによって、自分に足りない部分をどこか外からもらってくるようなあり方だった。誰かに依存してやってもらって、自分はちょっと楽なところで見ているようなあり方をしていた。それが症状の源になっているように思う。もうちょっと失敗してもいいから、自分でやって責任を負うようにやっていけば、それも経験になってつぎにつながっていくのではないか。自分は、中学の時に友人関係の面で親しく信じるといことでつまずいてから、ある面でどこかで止まっていたように思う。人を信じなくても自分1人で生きていけるんだというような感じでやろうとしていたけれど、それは非常に精神的に不安定だし、怖いことだ。また、人に邪魔されたくないから、一人でいようとするが、そういう行動のために結局自分を見失っていくことになる。自分一人で籠ったら、自分が何だか分からなくなる。だから、人と関わりを持ちながらやっていくしかないのだと思う。以上のようなことを語った後、前夜それに関連した夢を見たと言って報告する。

【夢19】 2日間位留守にしていたら、留守番電話にメッセージが一杯入っている。聞いてみると、昔のゼミの仲間や高校時代にあまり話をしなかった仲間からのメッセージが延々と一杯入っている。私は「Aからも入っている。Bからも入っている」と驚いている。そういえば、ずっと連絡していないから、たまには連絡しないと駄目だなど思っている。そういう相手が何十人も入っている。

芳男は「自分は今この夢のような気分なのだと思った。そういうふう感じられる位に気分が余裕が出てきている。震える症状はほとんどないし、震えても動揺しなくなった。以前みたいに対人場面から逃げたいというのはないし、逆に人と話したいと思っている。自然体でいきたい」と結んで面接を終えた。

Ⅲ. 考 察

1. 本例の「いじめられ体験」の背景

芳男は、幼時から父親との関わりが薄く、感情の不安定な母親との密着した関係の中で育った。母親は姉よりも彼を可愛がり、何かにつけて彼を褒める傾向にあった。そのような家族力動は、彼の誇大な自己像への固着を生み出すことに大きく関係していると考えられる³⁾。小学校時代の彼は、学業成績が良く多弁でもあったので、学級の中心的存在であった。芳男にとって、小学校高学年時代は最も楽しい「黄金の時期」であった。彼は密かに「俺は大したものだ」という誇大感、万能感を膨らませていったが、それは安定した現実的な自己評価ではなかった。

中学生になり、思春期を迎えて荒々しく変貌する仲間たちは、芳男にとって脅威を与える存在であった。彼自身は攻撃性を強く抑圧するあり方を示し、他者との対立や争いを避ける方であった。周りの荒々しい仲間たち、殊にD夫、Y郎など不良グループの者たちは、言わば彼の影を体現する存在であり、芳男は彼らに対して自身の影を投影して過度の恐れを抱くとともに、反発や敵意を経験することが多かったと思われる。おそらく、対抗恐ろ的な反応として、敵意や反感などを無意識的に表出し、それが不良グループを刺激して、彼らからの攻撃を招き寄せることにもなっていたのであろう。その限り、彼は「挑発的いじめられっ子(Olweus, 1978)⁵⁾」的側面をも有していたと言えよう。他方、芳男は優等生然とした振る舞いを示し、「自分は他の奴らとは違う。特別な存在だ」といった誇大感を抱いて、周りの者を軽蔑していたり、他者の気持ちを逆なでするような自己本位な言動を示すこともあった。また、服装などで目立つような傾向も見られた。そうした彼のあり方は、不良グループにとっても（彼らの影的な存在として）気に触るものとなり、彼らの反感を買うことにもなっていたと思われる。このように、本例の「いじめ」問題は、芳男の主観と不良グループの者たちの主観が交差する場において、いくつもの要因が複雑に関与しながら展開している。そして、そこではお互いの「影」という要因が大きな役割を果たしていたと考えられる。平島（1995）¹⁾は対象関係論的な概念を用いて「いじめ」の間主観的な構造について論じている。平島の論考は具体的な「いじめ」事例を分析したものではなく、試論であり、その点が惜しまれるが、多くの場合「いじめ問題」はそうした視点からとらえていくことも大切である。

2. 「いじめ」が本例にもたらした影響

中学校の仲間や上級生からの「いじめ」を受けることを契機として、芳男のあり方は大きく変化する。級友からの関わりは少なくなり、彼は他者への不信感を強め心理的に孤立していく。それまで抱いていた誇大感意識から切り離され、自己評価は大きく低下する。彼は中学時代の生活を捨て、高校での生活に望みをかけて受験勉強に没頭していくが、そうすることで自己

愛の傷つきを防衛することにもなっていたと思われる。中学時代に始まった仲間関係からの撤退、所属感の喪失は、彼の人格を一層不安定なものにし、現実的な自己像の形成を阻害するように作用したと考えられる。

高校入学後には、「いじめ」を受けることはなかったが、芳男の他者への不信感、身構えは緩まず、学級の仲間とは深く交流しなかった。他方、演劇部では、自分を表現する場を確保することができ、さらにJ子との関係を得る。彼は自己対象(selfobject; Kohut 1971)⁴⁾としてのJ子を理想化し、彼女との関係によって彼自身の誇大感は回復される。そこに見られるのは、「頼っている相手が素晴らしいから自分も素晴らしいのだという自信」という陳述が示唆するように、太古的な自己対象との関係である。ともかく、彼は演劇部においては多弁で積極的な自分を取り戻し、部の中心的存在として活動している。こうして、「演劇部での自分」と「学級での自分」という2つの異なった自己が併存、または交替する状態が生ずるが、後者は否認されがちで、彼の意識の中では誇大感を伴った「演劇部の自己」像の方が優勢となっていく。これは、Kohut流に表現すると、「誇大自己」と「現実自己」とが縦分割によって分断され、両者の間につながりの乏しい状態と言えよう。芳男の自己像は、極端に理想化された「明るく、積極的な自己」と「暗く、弱い自己」との両極に分かれ、この2つの間を揺れ動く不安定なあり方を呈することになる。

3. 対人恐怖症状発現のメカニズム

大学4年の夏に生じたJ子との別離、および親友Cとの関係の疎遠化は、芳男の人格を大きく揺り動かすことになった。自己対象機能を果たしていた重要な存在を失うことによって、誇大的な自己の体験は収縮する。その結果、理想的な自己像とかけ離れた弱い自己の側面を強く意識するようになる。理想的な自己像に同一化している自我は、弱い自己を恥じ、恐れて葛藤が強まる。他者の目に映る自己の姿がリラックスした良い感じであることにこだわる芳男は、対人場面でギクシャクしたり震えたりする自己を経験することを恐れ、対人関係において過敏となり、そのような弱い自己が出現すると動揺し、一層緊張してしまうのである。芳男の対人恐怖症状は、以上のような心理機制にもとづいて発現したものと考えられる。岡野(1992)⁶⁾は、(対人緊張や対人恐怖傾向などを示すことが多い)「過敏型」自己愛性格者の自己像が「理想自己」と「現実自己」とに極端に分極化しており、その両者の間の葛藤が恥の感情を生み出すと論じている。本例の場合も、太古的な自己対象との関係の喪失を契機として、理想的自己から現実自己(恥ずべき自己)への転落が生じ、恥の感情体験が強まったと言える。対人恐怖の病理について優れた考察を行った内沼(1977)¹⁰⁾は、対人恐怖症者の性格に内在する「強力性」と「無力性」の二面的矛盾構造を指摘し、その働きのもとに、例えば赤面する無力な自己をもう一つの面である強力性によって恥ずべき耐えがたいものと感じて、赤面に徹底抗戦を挑むのだと述べている。内沼の見解は、上述の岡野の論と類似するように見えるが、後者は自己

愛との関連で対人恐怖を論じたものであり、従来の対人恐怖症論にはない視点を含んでいる。岡野の見解(1992, 1993)^{6) 7)}は、日本文化との関連で論じられることが多かった対人恐怖症を、より広い視座からとらえ直すという意義ある試みであるが、彼の論考は自己愛の病理を扱っていないながら、Kohutの理論に依拠したものではない。筆者は、アパシー症候群や対人恐怖の臨床において、Kohutの自己心理学的な観点からクライアントの自己の構造形成を理解し、治療的接近を工夫していくことが有効であると考えているが、この点に関しては今後さらに検討を深めて報告していく予定である。本症例は、対人恐怖症状の発現に至るまでの契機とその後の経過、および治療の展開過程が明確であり、対人恐怖の精神力動を考える上での好例であると思われる。本稿をまとめた目的の1つはその点にある。

4. 治療過程で生じた芳男の成長、変化

治療初期において、芳男は治療者を万能の存在であるかのように理想化し、これに依存、あるいは同一化するような態度を示したが、同時に恐れを抱いている可能性もうかがわれた。治療者は、Kohutの自己愛的な転移に関する見解にならい、そうしたことを直接取り上げることを控えて、共感的関わりに専心した。筆者は来談者中心療法的立場から心理療法を学び始め、その後ユング心理学的な視座から臨床を行うようになった者であるので、共感的な関わりを重視する点では変わりはないが、自己愛的障害の治療における共感の機能を明確に理論づけた点でKohut理論の価値は大きいと考えている。ユング派分析家 Jacoby³⁾も指摘するように、Kohutが新たに提出した観点を援用することによって、自己愛的人格の治療をより効果的に行うことが可能になる。

治療者の共感的な関わりを経験していく中で、第2期に至ると、芳男は夢を介して中学時代の傷つき体験に触れ、それらを語り、振り返るとともに、以前の自分のあり方にも目を向け始める。また、自分の中にある誇大的な空想や不遜な感情を表明し、2つに分割され統合されていない自己のあり方を語るようになる。さらに、これまで影として拒否してきた内面の攻撃性にも目を向けるように変化していく。他方、理想的自己像とそれとかけ離れた自分の暗い面や弱い面との間の葛藤を口にするようになる。

第3期になると、心の深層世界を象徴する内なる女性像(アニマ)や本能衝動層のものとの関わりを回復しようとする動きが生じてくる。夢8ではアニマとの関わりが示されるが、深層と関わりをもつことには躊躇いや迷いが伴っていることもうかがえる。夢8には攻撃感情を経験する自己も登場するが、まだ統合された状態にはない。そのような動きと並行して、内的母親像との関係が変容し、父性的なものとの関係が発展していくようなプロセスも認められた。第25回面接において自分の問題に対する取り組み姿勢が取り上げられたのを契機にして、第4期に入ると自己への取り組みがより積極的なものに変化していく。夢では、心の深層からの訴えかけに耳を傾けるような姿勢が示されるとともに、他者との争いを恐れずに攻撃性を表現し

たり自己主張したりするような動きも生じてくる。現実水準では、震顫恐怖の背後で働いている心理機制についての気づきが語られる。この頃、アルバイトを始め、そこでの体験から人間関係の機微について学んでいく。そして、夢15ではいじめっ子Y郎との和解が表現され、攻撃的な影が自我に統合されつつあることが示唆される。第33回面接頃に指導教員およびM子から彼に突きつけられた苦言は、芳男が自己理解を深めていく上で重要な役割を果たした。芳男は、それらの指摘によって自分の自己中心性や共感性の乏しさに直面させられるが、治療者の共感的対応に支えられて自己のあり方を見据える作業を成し遂げていった。そこら辺りでは、現実の対人関係での体験と治療者との話合いとが相補的に作用しながら展開していくという不思議な巡り合せが認められた。

第5期に入ると対人恐怖症状が消失し、芳男は以前の自己愛的な対象関係についての洞察を語るようになる。第38回面接に報告された夢16における優しい女性像との関わりは、彼が感情の世界に開かれ、他者の気持ちを大切にするような方向に変容しつつあることを示唆している。続く第39回面接の夢17では、「自己顕示的な居間にいる自分」と「何もない部屋の無気力な自分」というイメージで自己の両極性が示されるが、分割され隔てられていた両者の間のつながりが回復されつつある印象である。それとともに、現実水準では、無気力な部分があることに意識が向けられるようになる。さらに、第41回面接頃には、芳男は自己の弱い面、暗い面を受け容れられるようになり、他者との交流に対して積極的な態度で臨むようになる。彼は中学時代に失った他者への信頼や親密感を取り戻し、以前よりも統合され安定した自己像を獲得したのである。この頃、彼が語った友人に対する感じ方は、より成熟した自己対象との共感的な関係が可能になったことを物語っている。なお、彼が終結間近になって問題にした無気力な面については、A大学専攻科に入学後、その大学のカウンセラーに2度ほどの面接を受けて克服したとの報告を受けている。

IV. おわりに

中学時代に「いじめられ体験」をもつ自己愛性格症例の心理治療過程を報告し、いくつかの問題について検討してきた。「いじめ」問題については、これまで種々の観点からの研究がなされている(鈴木1995)⁸⁾。この問題の背景としての社会構造や学校集団のあり方などに関する論考や調査研究、「いじめ」の心理の背景を論じたもの、「いじめっ子」「いじめられっ子」「傍観者」などについての社会心理学的調査研究などがその代表的なものである。しかし、具体的な「いじめ」事例に即して、ミクロな視点から分析した研究は極めて少ない。すでに述べたように、われわれ心理臨床に携わる者は、特定のクライアントの相談治療を通して「いじめ」問題に触れる機会を持つことが間々ある。例えば、学生相談において、本例と同じように過去の「いじめられ体験」の否定的影響をひきずっている不適応事例を経験する。中には、実際にはいじめられた経験がないのだが、本人が周りにいる特定タイプの仲間に対して不安、恐怖、被

圧迫感、被害感などを抱き、同時に内面では激しい敵意や反発を経験しているような「主観的いじめ」を訴えるケースに出会うこともある。そうした相談では、しばしば「影」を自我に統合することが主要なテーマになることが多い。「いじめ」問題をマクロな視点から分析していくことも重要であるが、影の問題を含めた間主観的な現象をミクロな視点から解明していく試みも必要である。

従来、対人恐怖は日本人に特有の神経症とされ、その精神病理は日本文化との関連で論じられることが多かった。しかし、最近精神分析の分野においては、対人恐怖症者にみられる恥の病理を自己愛との関連から理解しようとする試みが提出されている。筆者は、スチューデント・アパシーの研究との関連で自己愛の病理に関心を抱くようになり、そちらの方角から自己心理学の成果に触れるようになったのであるが、対人恐怖の理解に関しても自己愛理論が有用であると感じている。この点に関しては、今後さらに検討を重ねていきたい。

参考文献

- 1) 平島奈津子 1995 排除されしもの —「イジメ」の深層心理— imago Vol.6 (2).
- 2) 林竜介・他 1987 学校でのいじめによって発症した転換障害の1症例 精神医学 Vol.29, No3 329—331.
- 3) Jacoby, M 1985 Individuation and Narzissmus: Psychologie des Selbst bei C G Jung and H Kohut Verlag J. Pfeiffer GmbH & Co. (山中康裕監修 高石浩一訳 1997「個性化とナルシズム」創元社).
- 4) Kohut, H. 1971 The Analysis of the Self. New York, International Universities Press. (笠原嘉他訳 1994「自己の分析」みすず書房).
- 5) Olweus 1978 Aggression in the schools. Bullies and Whipping Boys. Washington, D.C.: Hemisphere Press (Wiley).
- 6) 岡野憲一郎 1992 恥の精神分析 —「過敏型」自己愛性格の病理— 精神分析研究 Vol. 36, No3 191—200.
- 7) 岡野憲一郎 1993 「過敏型」自己愛性格障害における罪悪感とエディプス葛藤 —「恥の病理」の背後にあるもの— 精神分析研究 Vol.37, No2 150—162.
- 8) 鈴木康平 1995 学校におけるいじめ 教育心理学年報 Vol.34, 132—142.
- 9) 立花正一 1990 「いじめられ体験」を契機に発症した精神障害について 精神神経学雑誌 92 (6).
- 10) 内沼幸雄 1977 対人恐怖の人間学 弘文堂.
- 11) 山岡正規・郡明文 1998 いじめを契機とした小学生登校拒否の治療 小児の精神と神経 第27巻 第4号.

(しみず のぶすけ 本学人文学部教授 臨床心理学専攻)